

第二十三話 自由の掟

生きるに値するいのち 188

皆様、きょうは、こういうことを考えてみましょう。一つ、皆様の頭の中で、昼も太陽の光を通さぬ、鬱蒼たる大森林を想像してください。その黒闇々の大森林のまんなかに、あなたがただひとり、没然と置かれたと考えてください。どこからか、こういう声が響いてきます。

「あなたの待ち望んでいた自由の世界だ。あなたは今、完全に自由なのだ。右へ行こうが左へ行こうが前へ進もうが後へさがろうが、寝ていようと立っていようと、あなたの望み次第。さあ、あなたの完全な自由を思う存分享受するがよい。」と。

「ただし、——と声が続けます——ただし、右へ行けば底なし沼に足を取られ、そのままずるずるとのみ込まれるかもしれない。左へ行けば大蛇の巣窟があるかもしれない。前へ進めば猛獣のえじきに、後へさがれば毒ぐもの巣にかかるかもしれない。が、それにしても、今、あなたを束縛するものはないのだ。法律も警察も、あなたを束縛することはできないのだ。さあ、思いきり、この自由の空気を吸うがよい。」

と。

さて皆様、仮にあなたが、そういう立場に置かれたとすれば、あなたは、「ああ、私は自由だ！」と、あなたを束縛するものがない気楽さを、ほんとうに気楽なことと思われませんか？ 多分、いや確かに、そうではないでしょうね。鼻をつままれてもわからぬ漆黒の闇に、あなたは自由であって、しかも自由でないことを痛感されるでしょうね。束縛のない世界を自由の世界と呼ぶなら、この暗黒の森林は、あなたにとって自由の天地であるはずで、その意味では自由でありながら、しかもなにかが欠けているのを感じざるを得ないでしょうね。

戦後、「自由」という思想が、日本に飛び込んで来ました。戦争中、なにごとにつけてもあまり自由でなかった私たち日本人は、急に、「さあ、お前たちは自由なんだよ。」と言われてもちょっと、戸惑った感じでしたが、それでもだれよりも先に、この自由に飛びついたのは、やはり、激しい生活意欲に燃えた若い世代でした。「おれたちは自由なのだ！」その自由は、すべての道徳を過去のものとして踏みじろうとしました。人間は自由に考え、自由に語り、自由に行動する権利を持っている、と若い世代は与えられた自由を享受することにちゅうちょしませんでした。けれどしばらくして、その自由がなにか不自由なことに気がついたのです。皆が自由を主張し、自由にふるまうということが、いつか生活の秩序を乱し、人間らしい生き方をどこかに置

き忘れたような生活なのだということに気がつきました。そして、改めて「自由」と「放埒^{はうち}」とを区別するようになりました。あらゆる束縛を脱して、したいことを存分にするということは「放埒」であって「自由」ではないのだ。人間の文化的産物としての「自由」という思想は、そういうものであるはずがない、と理解したので。では自由とはいったいなんなのでしょうか？

も一度、さきほどの大森林のたとえにもどりましょう。あやめも分かつた暗黒の中の束縛のない世界にいながら、あなたの心は、その時、何を求めるでしょうか？ 底なし沼にも引きずり込まれず、猛獣のえじきにもならないで、この暗黒から逃れ出るにはいったいどちらの方角に進んだらいいのだろうか？ だれか、だれか私を安全な道に手引きしてくれるものはいないだろうか？ あなたの心は道案内者を呼び求めますね。そして、もしも、その時、どこからか一本のたいまつが現われて、「さあ、この光について来るがよい。そうすれば、あなたはこの暗黒から脱け出ることが出来る。」という声が聞こえるなら、あなたは、その時こそ、ああ、助かったと歓喜の叫びをあげ、こおどろしつ、そのたいまつ^{たいまつ}の導きに従って行かれることでしょうね。その時、あなたは「だれだ！ 私について来いなど言うのは？ 私は自由でありたいのだ。君の言葉などには従わないぞ。」とは、おっしゃらないでしょうか。つまり、そのたいまつは、あなたを束縛するものではなくて、むしろ、あなたを解放してくれる救いの手だとお感じになるからでしょう。

猛獣のえじきにもならず、大蛇や毒ぐもの巣窟にも出会わないで、あなたの行くべき所、すなわち光明の世界に行き着くために、一本の安全な道が示された時にこそ、あなたは、ああ、私は助かった、とお感じになるでしょうね。

真の意味における自由とは、何をしていいかわからずにながら、しかも何でもできるという無意味な状態ではなくて、必ず、自分の行こうとしている目的への道に連なるものだということがわかりでしょう。目的があれば、その目的にあなたをまちがいなく安全に導いてくれるものを、あなたは束縛とはお考えにならないのです。たとえば、仙台から作並を経て山形に行こうとして車を走らせるとしましょうか。ところどころの別れ道や十字路に、山形への方向を示した里程表がありましょうが、あなたはそれをありがたいて思っ眺めこそすれ、決して束縛とはお感じにはならないはず、また、鉄道の踏み切りが下りているなら、あなたは、それを突切るようなばかな冒険をなさらないでしょう。つまり、山形へ行くには、そのための正しい道があり、また途中注意して守らねばならぬ掟^{おきて}があるのです。その指示と掟とは、あなたを完全に目的地に運ぶためがあるので、決して、あなたの自由を束縛しているものではありません。

ところで皆様、私は先日、全人類の知らねばならぬ人間存在の目的を知る道は、結局、人間を創造し給うた創造主、すなわち神ご自身の、それについての啓示を信じて受け取ること以外には

ないと申しました。そして、キリスト教という宗教は、キリストによって完成された神の啓示による人間の目的を全人類に伝えると主張しているのだと申しました。キリスト教は、全人類の知らねばならぬ唯一の真理として、人間は、神の愛によってこの世に創られ、再び神の愛なる永遠の生命、限りのない幸福と光榮の生命に帰り行くという、人間自身の思いも及ばぬ崇高な宿命に定められたものであると主張します。

しかし、だれでもが、どんな生命を生きようと、たとえば、ただ富や快樂の追求に明け暮れる空虚な生命に生きようと、だれでもがたやすく、その目的である永遠の生命にあずかり得るのではないので、限りなき正義、限りなき聖さである神の生命にあずかるためには、そのために、神によって定められた正しい道を歩みつつ、この世の生命を聖く正しく、内面的に充足したものとせねばならないのです。人間を、その終局の目的である永遠の生命に導く道を、神は人間各自の心の中の良心の声と、また、大自然を貫く自然法の中に刻み込み給いましたが、更に、神みずからの啓示によって神の掟を人類に与え給いました。

それこそ、さきほど申しましたように、この世の暗黒に引きずり込まれず、さまざまな誘惑のえじきにもならず、人間だれでもが辿り着かねばならぬ終局の目的に、誤りなく安全に私たちを導くための、いわば暗黒を照らすたいまつなのであって、束縛ではなく、むしろ、解放の

救いの御手なのであります。そして、この掟に従うとき、私たちは光に向かって進むのですし、その掟に逆らう時、私たちは光に背を向けて暗黒の中にさまようことになるのです。

ここまでお話しますと、光に向かって進む道が、それが私たちのなさねばならぬ「善」なのであり、光に背くこと、すなわち、その道にはずれることが、私たちのしてはならぬ「悪」と呼ばれるものなのだ……などという必要もないでしょうね。人間のなさねばならぬ「善」としてはならない「悪」と、この「善」と「悪」との、けじめのないところに「道徳」というものもあり得ないなどと、付け加える必要もないでしょう。

「道徳」……それは神のみ前に真剣に生きようとする人間の、あらねばならぬこの世の生命の姿です。その姿を、道徳、すなわち「道の徳」とは奇しくも名づけたものかなと思います。

生まれ落ちて、やがて物心ついた瞬間から、この世の生命を終わる間際まで、神の掟に従って、神が「なせ！」と命じ給う業を行ない、「なすな！」と禁じ給う悪を避けつつ、ひたむきに、神の生命に向かって歩み続け、登り続ける人の道、それなくして、どうして美しい人の世が築かれ得ましようか。

先日ちょっとお話しましたように、戦争中、私はインドネシアの原住民の宗教上の奉仕のため南方のセレベスに参りました。着いてしばらくのほどは気がつきませんでしたでしたが、そのうちに、

もちろん、それを作ることすらが、あまりと言えはあまりにも神をおそれぬ仕事しわざというのほかにありません。

世界中が神を見失ったのです。だが、だからこそ、その結果として世界がどうなっているのかを、私たちは知っていますね。私はここで、いつか申し上げた言葉を再び繰り返します。

「全人類が一度、神を見出し神をおそれることを知るようになるまで、人間の科学はこれ以上進歩してはいけないのだ！」と。神をおそれる心、すなわち、高い確固たる道義心の裏付けなく、人間の科学がひとり、先走りすることは恐ろしい危険をはらむことなのですから。

皆様、神を見出しましょう。神の啓示による人間の終局の目的を信じて受け取りましょう。そして、その目的に向かって、私たちの正しい道を歩みましょう。そして、そして、より美しい世界を築き上げようではありませんか？ 私の切ない呼び声に答えてくださる同志たちのひとりでも多からんことを祈りつつ、今宵はこれでお別れします。

皆様、ではまた来週、さようなら。

私は、表面にはもちろん出しませんが、その実、原住民の心の奥底では日本人に対する憎しみと軽べつとが、しっかりと根を張っているのに気がつきました。ある日、私に対する気安さきやすから、思わずふと口をすべらせたあるインドネシアの婦人に、私は面と向かって聞いてみました。

「いったい、どうして君たちは、そんなに日本人がきらいなのか？」と。

そして、その婦人の答えはこうでした。

「私たちは日本人がこわいのです。なぜなら日本人という民族はあまりにも神をおそれることを知らない民族だからです。」と。

武力をもって進駐した南方の島々で、警察も治安法もない、いわゆる自由の天地で、被征服者に君臨した日本の兵隊たちが、もしも、神をおそれることを知らないなら……ああ、それから先は言う必要もないでしょう。

「日本人はあまりにも神をおそれることを知らなすぎる！」

私はこの言葉を、私を通じて日本国民に与えられた警告として受け取りました。

だが、そういうと、皆様はきつと「では原子爆弾を広島や長崎に落としたことは神をおそれる人間のすることか？」と反問なさるでしょうね。そうです。原子爆弾や水素爆弾を落とすことは